

杜甫と白居易

岩崎 允胤

- I 杜甫
- II 白居易

キーワード：『詩経』『兵車行』『売炭翁』
「琵琶行」

I 杜甫「兵車行」

－1996年8月15日に書く－

1

中国最古の詩集『詩経』、おそらく周室東遷前後の作であろうといわれるその一篇「節南山」には、当時の施政にたいする民衆のきびしい憤りがこめられている。

不弔昊天
乱靡有定
式日斯生
俾民不寧
憂心如醒
誰秉国成
不自爲政
卒勞百姓

つれない天よ
乱は定まることとてなく
月々にいやすばかり
庶民には安寧な暮らしはなく
憂うる心は酔い迷っているようだ

誰なのか 国の大権を執りながら
自らは政（まつりごと）をなすことな
く
ことごとに百姓（ひゃくせい）を苦し
めるとは――

古代、現実の政治のなかから湧きあがる民衆のこのような切実な怒りは、中国詩の貴重な伝統を作ったのである。

それから千年近く後（のち）、盛唐の代表的な詩人杜甫（713－770）は、この伝統を発展させ、民衆の生活の立場にしっかりと立って、抑圧・収奪・徴兵にたいするかれらの批判の声を強く豊かに歌いあげたことを、かれの詩業の本領として掲げたのであった。

玄宗皇帝の在任中、安祿山の乱の数年前に杜甫が書いた反戦詩として最も有名なのは、「兵車行」である。その後、安祿山とそれにつづく史思明の反乱（安史の乱）によって、世は十年近くのアいだ動乱に明け暮れ、自然災害も重なり、民衆の生活は困窮した。家族連れの艱難にみちた流浪のなかで、杜甫は人為によっておこる悲惨の数々を目のあたりにみた。佐藤保は次のようにいう、「『北征』・三吏三別など、時事を描写する一連の社会詩は、さながら当時の歴史をうつすものとして、〈詩史〉と言われている。中国詩のリアリズムは、杜甫にいたって高い芸術性に到達したのである」と（前野直彬編

『中国文学史』東京大学出版会、所収)。

2

「兵車行」(「戦車のうた」の意)は、ひとたびそれを繻(ひもと)けば、なんびとも惻惻(そくそく)の思いに重く胸をうたれざるをえない。

咸陽、それは唐都長安の近郊、渭水(いすい)の北にあり、かつて秦の始皇帝の華やぐ宮殿で飾られ、項羽の進攻によって劫火(ごうか)に燃えおちた都市であったが、いま杜甫は、たまたま咸陽の、西城に向かう大道(だいどう)の道傍(どうぼう)を過ぎ、兵車人馬の群がる長い行列に出会う。車の音、馬の嘶(いなな)きでにぎにぎしく、兵士は弓矢を腰にし、父母妻子は小走りにこれを見送り、一面にたちこめる塵埃で咸陽橋もほとんどみえない。兵士の衣にすがっては足をばたつかせ、道をさえぎっては泣き叫ぶ、その慟哭(どうこく)の声は、空高くたちのぼって、天をもおびやかさんばかりであった。

杜甫が兵士に尋ねると、兵士は「徴兵しきり」と答えるのみ。かれらはこれまでいくども強引に徴発をくりかえされてきたのだった。

或從十五北防河

便至四十西營田

あるいは十五より北のかた河を防ぎ
すなわち四十に至るまで西のかた田を
営む⁽¹⁾

思えば、最初出征したときは未成年であったが、いまようやく、

帰来頭白還戍辺

帰来るとき頭白きにまた辺を守る

髪も白くなって帰ってきたが、ふたたび妻子

と別れて辺境の守りに駆り立てられる仕末だ。

辺庭流血成海水

武皇開辺意未已

辺庭⁽²⁾の流血海水となるも

武皇辺を開く 意いまだやまず

兵士の血潮が流れながれてついに海となっても、さらに多くの辺境を開いておのが掌中におさめたいという皇帝(玄宗)の野望は、いつになっても止むことがない。

君にはあの声が聞こえてこないか。華山の東方二百州(いわゆる関東の地)、たくさんの村落では、男手がなく灌木や雑草が繁るばかりで、健気(けなげ)な嫁が鋤をとって耕し、作物は生えてはくるものの、荒れ放題、西も東もあったものではない。ましてや、この長安・咸陽を中心とする一帯の土地は、かつて音にきこえた強い秦兵の出身地、それだけにいまも徴発がとくにきびしく、耕地の荒廃はひときわ著しい。

兵士は口をひらく。あなたはお尋ねになるが、自分にはもはや恨みを申す気分もないのです。

長者雖有問

役夫敢申恨

且如今年冬

未休関西卒

県官急索租

租税従何出

長者問うことありといえども

役夫あえて恨みをのべんや

かつ今年の冬のごときは

いまだ関西の卒を休めざるに⁽³⁾

県官急に租をもとむ

租税いづくより出ださん

いっそ男など生まなければよいのだ。いちど生まれれば、男には、生きるも死ぬるも、地獄

(1)屯田兵となった

(2)辺境のこと

(3)帰休させないのに

の苦しみが待っているばかりだ。

信知生男悪
反是生女好
生女猶得嫁比隣
生男埋沒隨百草
君不見青海頭
古來白骨無人收
新鬼煩冤旧鬼哭
天陰雨濕声啾啾

まことに知る 男を生むは悪しく
反ってこれ女を生むはよきを
女を生まばなお比隣⁽⁴⁾に嫁するをえん
男を生まば埋没して百草にしたがうの
み
君見ずや 青海⁽⁵⁾のほとり
古來白骨 人の収むるなく
新鬼は煩冤（はんえん）し⁽⁶⁾旧鬼は哭
（な）き
天陰（かげ）り雨濕（しめ）るとき声
啾啾（しゅうしゅう）⁽⁷⁾たるを

杜甫のこの詩を読めば、なんぴとも言葉をほとんど失い、新鬼旧鬼の慟哭のまえに、もはや沈黙した方がよいのかもしれない。だがそれでもわたくしはなお思う。かつて日本がおこなった侵略戦争の惨禍を。アジア諸民族の誇りを根底から踏みにじり、数十万の無辜（むこ）の人命をうばいさったわが国の犯した暴逆非道の罪業を。そして裕仁が責を負ってみずから皇位を退くことなく便々（べんべん）とその座に居据（いす）わり、佞臣（ねいしん）は「皇統」を重んじて最高の勲位を誇り（そんなものは一片

の人間的な価値もない）、かつての戦犯⁽⁸⁾が戦後の政界に返り咲き、六十年新安保の批准をファッション的に強行し、その弟⁽⁹⁾は鼎（かなえ）の軽重すら問われる「ノーベル平和賞」に在り付き、自民党は悪しき伝統をうけつぎ、いまや橋本政権は、アメリカの傀儡（かいらい）政権たるの実体を露骨に顕わし、憲法違反の新しい「ガイドライン」を結び、アメリカが自国の利益の見地から勝手に「制裁」をふりかざしておこす「有事」の軍事行動にこの国が即座に呼応して協力するための、法的条件の整備に狂奔している。日本の進むべき道は、非核・平和、非同盟・中立であるべきであるのに――。

為政者（いせいしゃ）には、聞こえてこないか。かつて「赤紙」一枚で戦場に駆りだされて野辺に白骨と化した有為な青年たちの幽鬼が、痛恨・憤怒・悶絶の声をあげているのが――、そして広島・長崎の地底からは、「核兵器なくせ」の啾啾たる声が、いく万もいく十万も湧きあがってくるのが――。

〈追記〉 わたくしはこのあと「三吏三別」とよばれる杜甫の六篇の詩から「石壕の吏」一篇をとりあげて考えようと思っていた。その六篇の詩は、今日、四川省成都、浣花溪（かんかけい）の流れのほとりに立つ杜甫草堂に高く掲げられる、六幅の木彫の額に刻まれている。この草堂は、かつて詩人が流亡（るぼう）漂泊の身を数年間休めた草庵（それは「浣花草堂」と名付けられている）の跡に、そのゆかりで後年建てられたものである。――だが、いまは、かれの「兵車行」の訴え

(4)となり近所

(5)遠く青海省の青海湖（吐蕃ではココノールとよぶ）のあたり

(6)もだえ苦しむ

(7)天空の霊の泣き声のさま

(8)岸俊介のこと

(9)佐藤栄作のこと

るところを限りなく重く受けとめれば、すべて足りると思われる。他日折があれば、かの美しい成都と「浣花草堂」、そして杜甫の永遠の詩的精神についてあらためて語ることになりたいと思う。

Ⅱ 白居易「賣炭翁」「琵琶行」

1

中唐の詩人、白居易(772-846)が生を享けたのは、杜甫が世を去って2年後である。生家は、代々官吏を勤めたというものの、地方官を出す程度の、高いとはいえない階層にぞくしていた。かれは科擧の試験に合格して、陝西(せんせい)省の役人をふりだしに左拾遺(さしゅうい、皇帝の諫官)を勤め、一時(いちじ)、左遷の時期もあったが、杭州・蘇州の刺史(地方長官)となり、刑部尚書(法務大臣)に就いて致仕した。当時、上層支配階級の墮落は目に余るものがあり、加えて宦官(かಂಗん)の跋扈(ばっこ)もはなはだしく、諫官としてかれは皇帝憲宗にしばしば建議や直諫(ちよっかん)もした。

白居易の主張によれば、詩はたんに「風雪に嘲(たわむ)れ、花草(かそう)を弄ぶ」ことで、足れりとするものではなく、『詩経』の精神によれば、「上は以て時の政(まつりごと)を補(たす)け察(はか)り、下(しも)は以て人の情(じょう)を洩(あら)わし導く」ものでなければならぬ。これこそが詩の本領であるはずである。そこでかれは「新樂府(しんがふ)」とよばれる諷諭(ふうゆ)詩を作り、誇りをもって当時の政治の腐敗乱脈、社会の淫逸混迷を批判した⁽¹⁰⁾。かれのこれら一連の詩篇は

先立つ杜甫の精神を継承したものである。かれの詩はすでに九世紀にわが国に伝わっており、『白氏文集(はくしもんじゅう)』とよばれて、菅原道真、紀貫之、清少納言、紫式部をはじめ、以後、日本の芸文への影響にはひじょうに大きいものがあつたが、かれの批判精神はまともに受けつがれることなく、花鳥風月(そのもとでの色恋)が詩歌の主題として愛好されるにとどまった(本居宣長も『源氏物語』をたたえ、和歌は「もののあはれ」を表出するものとしている)。わが国にも『万葉集』における山上憶良の「貧窮問答歌」や防人歌などのような立派な詩的伝統がうまれはじめていたにもかかわらず、これはよく継承されることがなかった。

2

次にまず「新樂府」中の一首「賣炭翁」をみよう。この詩には「宮市に苦しむなり」という原注が付いている。当時、長安の都の宮中では、宦官を係官(かかりかん)とし、勅命と称して庶民の物資を強制的に安価で買いとるのはもちろんのこと、ときには強奪をすらあえてする公的機関が設けられていた。それは宮市とよばれた。

さて、詩はいう、炭を売って暮らす貧しい爺さんがいる。かれは、都城に近い終南山で薪(たきぎ)を伐(き)って炭焼きをしている。左右の鬢(びん)には白髪(しらが)がまじり、顔中は埃と灰にまみれて煤(すす)けた色をし、十本の指は黒ずんでいる。炭を焼いて小銭(こぜに)を得て、爺さんはいったいどうしようというのか。生きるには、身にまとう衣と口にする食べ物が要(い)るのだが、かわいそうに、寒空(さむぞら)というのに、単(ひと)えの

(10) この箇所、高木正一注『白居易』上、解説、中国詩

人選集、岩波書店に負う。

衣しか着ていない。それでも心では、炭の値段が下がらないようにもっと寒くなればいい、と願っている。

願いどおり、昨夜から都城のあたり一尺も雪が積（つ）もった。そこで、爺さんは早朝氷の張った道を、牛に炭車をひかせて出かけてゆく。牛はやがて疲れはて爺さんはひもじくてならない。日も高くのぼった頃、市の南門の外に辿り着き、泥（どろ）んこの雪解け道のほとりに腰をおろした。すると、向こうから二騎が疾走してくるではないか。みると黄色の衣をつけた宦官の使者と、白い衣をきた若者の従者だ。

翩翩兩騎來是誰
黃衣使者白衫兒
手把文書口稱勅
廻車叱牛牽向北

翩々たる兩騎 来たるはこれ誰ぞ
黄衣の使者と白衫（さん）の児（じ）
手に文書を把（と）り口に勅と称し
車を廻（めぐ）らせ牛を叱（しつ）し
牽（ひ）きて北に向かわしむ

こうして牛を北の宮市へ引立ててゆく。一台の車に積んだ炭は重さ千余斤（きん）ほどの量——せっかくの労働の成果——であるのに、爺さんは惜しくてもどうする術もない。どれほどの対価（たいか）をもらったというのか。

一車炭重千余斤
宮使驅將惜不得⁽¹²⁾
半匹紅綃⁽¹³⁾一丈綾
繫向牛頭充炭值

一車の炭 重さ千余斤
宮使 驅（か）り將（さ）りて惜しみ
得ず
半匹の紅綃（しょう） 一丈の綾（あ

や）

牛頭に繫（か）けて 炭の値（あたひ）
に充（あ）つ

3

白居易はまた、情感溢れる詩語が、おのずと豊かに迸（ほとばし）りでてくる詩人で、心に深く沁みいる物語り風な詩を、同時代の韓愈などとはちがって、読みやすい平易な言葉で書いた。なかでも「千古の名作」として古来「長恨歌」とともに並び称（たた）えられるのは、「琵琶行」である。前者の方が有名かもしれないが、わたくしの趣向からすれば、後者をこそとりたいたいと思う。

「琵琶行」は、白居易が江州の司馬に左遷され草舎に謫居（たっきょ）していた頃の作である。ある夕べ、詩人は船で旅に出る客人を見送るために船着き場に行ったところ、かつて琵琶の名手であったが、いまは人妻となりながら、ひとり琵琶を抱いて渡りあるく薄幸の佳人とふと出会い、その絶妙な調べと、かの女の悲しい身上話をきいて、わが身もわびしい流謫（るたく）の身であることが思いあわされる。そして、詩人は、仙樂（天上の音楽）ともまごうような佳人のみごとな調べに寄せるしみじみとした共感を、哀愁のこもる美しい一篇の長詩に表出した。この詩は抒情詩人白居易一代の絶品ではなからうか。涙を催さずにひとはそれを口に誦することがはたしてできるだろうか。

潯陽（じんよう）江のほとり、夜の帷のようやくおりてくる頃、客を見送りに港に出かけると、そのあたり楓（かえで）の葉は色づき、荻（おぎ）の花は白く咲き、わびしい秋の風情がただようている。客の船で盃を挙げて飲もうと

(12) 惜しんでもどうにもならない。

(13) 二丈のくれないの薄絹

思うが、そこには管絃（かげん）とてなく、酔っても飲ぶとはならず、残念だがこの辺でお別れをしようということになったとき、ふと船の外に眼をやると、はてしなく広い大川には月の光がたゆたうように浸（ひた）っている。と、急に、水上どこからか琵琶の音（ね）がきこえてくる。その音を頼りに船を近づけ、宴（うたげ）の用意をして奏者を呼んでみたが、答えがなく、やっとのこと出てきたものの、佳人は琵琶をかかえたままで半ば顔をかくしているばかりである。

しかし、やがて佳人は、愛琴の音締（ねじ）めをして調子を整え、おもむろに奏ではじめる。何の思いがこめられているのか。

絃絃掩抑声声思
似訴平生不得志
低眉信手続続弾
説尽心中無限事

絃々に掩抑（えんよく）⁽¹⁴⁾して声々
（せいせい）思いあり
平生志を得ざるを訴うるに似たり
眉を低（た）れ手に信（まか）せて続々
として弾じ

説き尽くす 心中無限の事を

佳人はその指を巧みに使って、弦を、軽く抑え、緩（ゆる）やかに撚（ひね）り、つまんで、はまたはねる。はじめに霓裳羽衣の曲⁽¹⁵⁾を弾き、また、六幺（ろくよう）の曲を奏でる（白居易によるその弾奏の描写は次のようにじつに巧みである）。

大絃嘈嘈如急雨
小絃切切如私語
嘈嘈切切錯雜彈

大珠小珠落玉盤
間關鶯語花底滑
幽咽泉流水下難
冰泉冷澌絃凝絕
凝絕不通聲暫歇

大絃は嘈々⁽¹⁶⁾として急雨のごとく
小絃は切々として私語（しご）のごとし

嘈々と切々と錯雜⁽¹⁷⁾して弾じ

大珠小珠 玉盤に落つ

間関（かんかん）たる鶯語（おうご）

花底に滑らかに

幽咽（ゆうえつ）せる泉流 氷下に難
（なや）めり

氷泉は冷澌して 絃は凝絶し

凝絶して通ぜず 声（こえ）暫らく歇
（や）む

さいごの五行、その大意は、さながら大きな真珠と小さな真珠とが美しい玉（ぎょく）の盤上に落ちて転（ころ）がるかのよう、また、鶯のなごやかな囀（さえず）りが梅花の下にきこえるかのよう、ときにはまた、泉流が氷の下に流れ兼（か）ねてしばし咽（むせ）んでいるかのよう、—— あげくにはまた、冷い泉水がまるで凍（い）てついたかのように、絃は凝（こ）ったようになって音がとだえる。その暫しの音なしの静寂（しじま）、これは音の通うよりもずっとすぐれている。かと思えば、突如、銀の瓶（かめ）の碎けたように音がはじけて迸りでて、激しく交叉してにぎやかに鳴りひびく。そして曲が終わって、佳人は、撥（ばち）を弦から引いて胸もとで大きな弧を描くとみるや、四絃を同時に一気に強くはらう。

(14) 抑えとどめるような調べで

(15) 霓裳羽衣の曲は、西涼から伝わり、皇帝玄宗が手を加えたといわれる。天女を歌った舞曲。

(16) さわがしく

(17) いりまじって

四絃一声如裂帛
東船兩舫悄無言
唯見江心秋月白

四絃の一声 裂帛の如し⁽¹⁸⁾

東船兩舫 悄として⁽¹⁹⁾言なく

ただ見る 江心⁽²⁰⁾に秋月の白きを

佳人は自分の身の上を語る。かつて長安の都で琵琶を学んで名手とたたえられ、貴公子らは競って彼女のために贈物をとどけた。賑やかな宴(うたげ)のおりには、螺鈿(らでん)で飾られた銀の櫛も、夢中で拍子をとっているうちに碎けてしまい、真紅の薄帛(うすぎぬ)の裳裾も、零(こぼ)れる美酒にしっかりと濡れてしまうありさまであった。こうして来る年も来る年も、歓楽の日々が知らぬ間に過ぎていった。

今年歡笑復明年

秋月春風等閑度

今年(こんねん)歡笑してまた明年

秋月春風等閑に度(わた)る⁽²¹⁾

だが、やがて気が付くと、容色は衰え、訪ねる客はいつしか稀になっていた。

暮去朝来顔色故

門前冷落鞍馬稀

暮去り朝(あした)来たりて顔色故

(ふ)る

門前 冷落して⁽²²⁾鞍馬稀なり

過ぎし日は帰りこず、とある商人に嫁したが、利を事とするこの男には軽んじられるばかり、いまは江湖に流浪して、夜な夜な、ただ若かりし、あの華やかなりし日々を夢みるばかりである。夢のなかで泣けば、涙は化粧とまじりあって、紅に染まってしとどに枕を濡らした。——佳人はしみじみとこう語るのであった。

詩人はこの言葉を聞いて、自分もまた同じく「天涯淪落(りんらく)」の身であると、都を遠く離れて僻地に送る流離の境涯を語る。あなたと、はしなくもこうしてともに座しているのも、ただひとたび、ただひと夜(よ)の、この奇(くす)しき出会い(おそらく今宵これで離別すればまたと会う日はおそらくはない、孤独なたがいの身の上)。出会いとはさても一つの不思議なこと、

相逢何必曾相識

相逢うはなんぞ必ずしも曾ての相識のみならんや

潯陽に謫居する自分には、一年中、あの都のなつかしい管絃(かげん)の調べを耳にする機会とてない。しかし、今宵は、仙樂にまごうあなたの琵琶の調べをきいて、耳はしばし清められた思いがする。佳人よ、辞退しないで、どうぞもう一曲、別れの調べを。わたしはあなたのために「琵琶行」を作って捧げましょう。

莫辞更坐彈一曲

爲君翻作琵琶行

辞することなかれ さらに坐して一曲を弾ぜよ

君がために翻(ひるがえ)して⁽²³⁾琵琶の行(うた)を作らん

その言葉をきいた佳人の、こころのうち深く思いをこめた静かな立ち居、そして、ふたたび座に戻って撥をとり弦を弾ずる。そのますます急を告げる、痛ましいほどの寂寥(せきしょう)を訴える別離の終曲は、じつにみごと、座にいる者はみな涙を催さずにはいられなかった。

感我此言良久立

却坐促絃絃轉急

(18) 帛(きぬ)を切り裂くかのよう

(19) 感動のあまりひっそりとして

(20) 川のただなか

(21) うかうかとすぎた

(22) うらぶれて

(23) 琵琶の調べのことを詩に作りかえて

凄凄⁽²⁴⁾不似向前声

満座重聞皆掩泣

座中泣下誰最多

江州司馬青衫濕

わがこの言に感じて ややしばらく立
ち

却（しりぞ）き坐し絃を促せば 絃う
たた急なり

凄凄（せいせい）⁽²⁴⁾ として向前の声に
似ず

満座重ねて聞き みな泣（なみだ）を
掩（おほ）う

座中泣下（くだ）ること たれかもっ
とも多き

江州の司馬 青衫（せいさん）⁽²⁵⁾ 濕
（うるほ）う

(24) さびしくいたましいさま

(25) 下級役人の青い上着